郷土史への扉

俊寛が船出をした港

―中世の鳩脇八幡崎―

錦江湾奥部の港湾

平安時代の終わり、安元三（一一七七）年六月一日、平家打倒の計画、鹿ケ谷事件が発生しました。密告により、後白河法皇の部下、藤原師光は捕まって首を切られ、大納言藤原成親も追放の上、殺されました。法勝寺のお坊さんをしていた俊寛や平康頼・藤原成経の三人は絶海の孤島、「硫黄がしま」に流されてしまいました。翌一一七八年、康頼・成経の二人は罪を許され、京都に戻ります。その時のルートが『平家物語長門本』に次のように書かれています。「さつまがた、房の泊りといふ所より、鹿児島、逢の湊、木入津、向島をも押過ぎて、鳩脇八幡崎にぞ着き給ふ、それより取りあがりて、宮中の馬場執印清道と申がもとにやどせられたり」。康頼と成経の二人が、坊津から知覧、喜入、鹿児島、桜島を経由し鳩脇の湊に上陸、宮内の馬場清道という人の家に寄ったことが書かれているのです。清道という人は、平清盛と交流のあった桑幡氏第五三代の息長清道のことです。俊寛たちは「硫黄がしま」に流された時も同じルートをたどっており、結局、俊寛一人その島に取り残されてしまいます。

錦江湾奥部の遺跡

隼人町宮内地区にある鹿児島神宮は、古くは大隅国正八幡宮と呼ばれ、大隅国の半分近くの領土を持っていました。その神宮の仕事を代々していたのが、社家と呼ばれる桑幡・留守・沢・最勝寺の四家です。長い家では平安時代から千年も続いています。この社家の館跡が発掘調査され、たくさんの穴や溝（堀）・焼き物が見つかっています。一〇〇メートル四方の大きな館で、周囲に堀と土塁を巡らして防御を厳重にし、館の中では、たくさんの海外の焼き物を使っていたことも分かりました。中国の青磁・白磁・青花、朝鮮の高麗青磁、タイ・ベトナムの陶磁器などがありました。このような海外の焼き物がどのようなルートで入って来たのかはまだ分かっておりません。そこで、記録に残る港や地名などが手がかりとなります。

記録に登場する鳩脇八幡崎

国分平野の西端、隼人町野久美田に、現在は清水川と呼ばれる川があります。この川はかつて鳩脇川と呼ばれていたことが分かってきました。川のそばの山には「破戸脇」という小字名がまだ残っています。高速道路がトンネルに入る、岩に龍が描かれているあたりがその場所です。

江戸時代、全国を測量して歩き、日本全図を作成した伊能忠敬の伊能図にも、清水川の位置が鳩脇川として記されています。文化七（一八一〇）年には今の清水川は鳩脇川と呼ばれていたことは間違いありません。隼人町野久美田清水が記録に出てくる「鳩脇八幡崎」であると特定できたのです。

桑幡さんの家の「由緒書出帳」という記録に次のようなことが書いてあります。大永七（一五二七）年、旧国分市域で活動していた本田氏が攻めてきて、大隅国正八幡宮が焼けたため、天文二十（一五五一）年に祭神を京都から運ぶことにして、桑幡氏一族の三角氏がその使者にたち、鳩脇八幡崎に船が着いて、蒲生八幡の御輿に乗せ、鳩脇八幡崎の東にある鑰島神社に奉納した」というのです。その際、島津日新公（第一五代島津貴久の実父）も参拝したようです。この記録によって、十六世紀半ばには鳩脇八幡崎が港として機能していたことが明らかとなりました。富隈城にいた島津義久が、琉球渡海の朱印状を住吉丸に発行したのが慶長七（一六〇二）年のことです。富隈之湊（現浜之市港）が、発展するのはこの江戸時代からで、それ以前は鳩脇八幡崎が港として機能していたと考えられます。鳩脇八幡崎は、俊寛が船出をした港であり、宮内地区で見つかったたくさんの海外の焼き物もこの港から入ってきた可能性が高いと言えます。

「アメリカの伊能大図とフランスの伊能中図」
発行所：㈶日本地図センター